

新刊紹介

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集委員会が選択して紹介いたします。

『ブラジャーで天下をとった男： ワコール創業者 塚本幸一』

北康利 著 | プレジデント社、2023年、386pp.

奇抜な書名であるが、本書は、女性用下着など衣料品・製造販売のトップメーカー「ワコール」を創業した塚本幸一の伝記である。

近江商人の家系に生まれ、滋賀・八幡商業を出て二十歳になった塚本は、戦争に召集され、中国、タイ、ビルマへと送られる。そして第二次大戦の日本軍の戦闘では最も過酷で悲惨な結果を招いたとされる「インパール作戦」へと従軍させられるのである。彼はそのインパール作戦の、数少ない生き残りの一人だったのである。他の生き残った人々と同じように、話す事も憚られる戦場での心傷は、彼のなかで生涯消えなかったとされる。

復員した彼は、新たな2つめの人生を得たのだと考え、八幡商時代の仲間や、社内で後に伝説のように語られる女性社員たちと共に、戦後の新たな価値観や美意識を捉え、女性や世の中が求めているモノを追求して、事業を推し進めて行くことになる。

戦前・戦争直後は、現在とは比べられないほど女性の社会的地位が低く見られていた時代だったが、そのような中、女性用衣料の製造販売を事業の柱とし、競争会社の製品や、日本に上陸してくる米国企業に、敢然と立ち向かいながら、事業を拡大させて行くのである。

書籍全体として、塚本の生き方が美化された形で書かれているため、それを考慮しながら読む必要があるが、企業としてのワコールの事業立ち上げや事業拡大の過程、そして彼の人間としての生きる様を知るには、とても良い書物であり、読み応えのある内容になっているといえるだろう。

(評／『彦根論叢』編集委員／清宮政宏)

『新幹線全史： 「政治」と「地形」で解き明かす』

竹内正浩 著 | NHK出版、2023年、350pp.

東海道新幹線の開業は1964年、今年で60年となる。超特急と呼ばれる初の高速列車だったが、実はルートの多くが、戦前にあった「弾丸列車計画」という東京～下関を結ぶ計画の再利用だったのである。本書は、日本の経済・社会を支えるインフラの1つとなっている各地の新幹線が、何故どのように設定されたのか、またどのような係争でルートや駅が変更されたか等について説明している。

ところで時速200-300キロで走る新幹線は、カーブを描く場所では在来線と同じようなレール敷設はできない。高速を保ちながら走るために、円周軌道を描くような大回りでの敷設が必要となる。さらに標高の高低差を稼ぐためのレール敷設も異なったものとなる。つまり地形上の制約に対処した上で、高速運転のためのルート設定が必要となるのである。

また上記とは別に、政治的意図の影響も多分に受けたものとなる。背景として、高度経済成長期の国土開発があり、住民等による反対活動もあった。さらに国鉄民営化の影響を受けた路線もある。様々な経緯を経て、今日の新幹線が存在するのである。

本書を読むと、それらが細かく説明されており、新幹線ルートが地形と政治によって決定されたことがわかるようになっている。

私自身、鉄道経営に関する論文も書いているが（ローカル鉄道の観光客集めで、新幹線ではない）、とても興味深く読むことができた。新幹線の歴史・問題を記した本書は、現代日本の経済・社会を支え、日本の技術を集約させた新幹線を、深く知るには良い書籍ではないかと思われる。

(評／『彦根論叢』編集委員／清宮政宏)

